〔連載〕武州みたけの信仰⑧

大己貴命について（中）

国学院大学教授
神道学博士
三橋　健

偉大な穴を持つ神

大己貴とは「偉大な穴を持つ貴いお方」というほどの意味ですが、その偉大な穴が何の穴であるかについては、諸説があり、必ずしも一致しておりません。

さまざまな見方があってしかるべきで、それらを強いて一つにする必要はないと思いますが、いささか整理をしてみますと、以下のような三説が注目されます。

(1)砂鉄を採る鉱山の穴
(2)洞穴
(3)火口

このうち私が興味を引かれるのは、(3)の火口説であります。つまり偉大な穴とは噴火口であると思います。そこで、そのように考える理由を以下に述べて見ることにいたします。

『延喜武神名帳』に、大穴持神社が五社記載されております。すなわち、

大和国（奈良県）葛上郡に一社
出雲国（島根県）意宇郡に一社
同じく　出雲郡に一社
同じく　神門郡に一社
大隅国（鹿児島県）曾唹郡に一社で

あり、このほかに能登国（石川県）能登郡に大穴元持神像石神社があり、大和国吉野郡に大名持神社、播磨国（兵庫県）宍粟郡に大穴持御魂神社、筑前国（福岡県）夜須郡に於保奈牟智神社が記載されています。これらも大穴持神社と同じ系統に属するものと考えられます。

上に揚げた大穴持系統の神社の由緒を詳しくたずねていけば、大穴は火口であることが明白になってくるものと思われますが、ここにそれらの全部について述べるいとまはないので、大隅国の大穴持神社の場合について述べてみることにいたします。つまり大隅国曾唹郡に記載される大穴持神社は、どのような経緯で祭られるようになったかをたずねて見ることにより、大穴の意味を知りたいと思います。

火山の神

『続日本紀』淳仁天皇の天平宝字八年（七六四）十二月の条に、

「西の方で雷に似た声が聞こえた。大隅と薩摩の国境に煙のような雲が立ちのぼり、空は暗くなり、たびたび稲光が走った、七日後、空は晴れて、鹿児島の信爾村の海に変化が起こり、三つの島ができた」と見えます。この記録は、恐らく桜島の噴火の様子を伝えたものと思われますが、この噴火によって海中に三つの新しい島ができたと伝えています。

これと関連する記事は、二年後の天平神護二年（七六六）六月五日の条にもあります。すなわち、次のように記しています。

「大隅国の神が新しい島をお造りになった。そのため大地が震動してやまなかったので、人民の多くは住居を定めることができず、あちこちとさまよい歩いた」

この記録に見えるように、古代人は神が噴火や地震をおこし、新しい島をお造りになると信じておりました。現代のように火山は地下のマグマに由来するなどとは考えなかったのです。

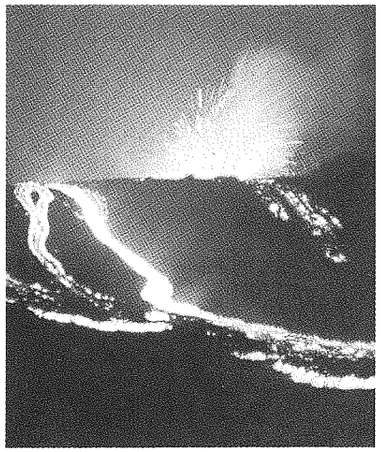
それは宝亀九年（七七八）十一月十二日の条の記録から、より明白となります。

「去る天平神護年中（七六五～七六七）、神は大隅国の海中に新しい島をお造りになりました。その神のお名前は大穴持の神といいますが、このように新しい島をお造りになった霊験により、この神を官社に列しました。」

この記録で、注目されるのは、大穴持という神が火山をおこして新しい島をお造りになったと伝えていることであり、これにより大穴持の神は火山の神であり大穴は火口であることがわかります。

なお官社に列したとは、この大穴持の神は『延喜式神名帳』に記載され、祈年祭の奉弊にあずかったことを意味しています。それゆえ、この神は『延喜式神名帳』の大隅国曾唹郡に登載される大穴持社であることはほぼ確かとなります。現在、鹿児島県国分市広瀬に鎮座する大穴持神社のこととされています。

また天平神護年中に神が海中に島をお造りになったと記していますが、これは前述したように、詳しくは天平神護二年六月五日のことであります。


伊豆大島三原山噴火

国土開拓の神

ところで、前回にふれておきましたように、大己貴の己は土地の意味であり、したがって大己とは大地の主ということになります。

この説に疑問はないではないが、ひとまず己を土地と考えてみますと、この神を大国主とか大国玉、あるいは国作大己貴などと称して理由もわかります。大国・国玉・国作などの国は、天に対する地のこと、すなわち国土・大地のことであります。

そして、上述したように、国土は大己貴の別名である大穴持が噴火をおこして新しく造成・開拓されると考えてきました。

例えば、『三宅記』には伊豆半島をはじめ伊豆諸島は、三島大明神の島焼きによって造成されたと記してあります。島焼きとは噴火のことです。また大明神は海水を集めて焼かれたともあります。これは海底火山のことです。

このように火山を神慮によるものとする考え方は現在も生きております。伊豆の大島では三原山の絶えることのない噴煙を御神火として仰いでおります。つまり噴火は神の火であるとして神聖視しています。また火口をミホラ（御洞）・ミホト・オアナ（御穴）、容岩流をオナガレ（お流れ）、火山灰をゴハイ（御灰）、噴煙をオケブ（御煙）などと崇めております。